

[ 成果情報名 ] ピワの緑枝の発生がない枝の鋸傷処理による効率的な新しょうの発生方法

[ 要約 ] 鋸を使い緑枝の発生していない枝に傷をつけると、傷をつけた周辺の葉の脱落痕から不定芽が効率的に発生し、多くの新しょうを確保できる。枝傷にはパラフィルム系資材の接ぎ木テープを巻くことで傷口を保護でき、不定芽は自力でテープを破り発芽する。

[ キーワード ] 鋸、枝、傷、不定芽、新しょう

[ 担当 ] 長崎果樹試・常緑果樹科

[ 連絡先 ] 0957-55-8740、電子メール takami@pref.nagasaki.lg.jp

[ 区分 ] 九州沖縄農業・果樹

[ 分類 ] 普及

---

[ 背景・ねらい ]

「長崎早生」「陽玉」等の樹勢の旺盛な品種では、枝が徒長的に伸び、樹冠内部に新しょうがないので無効な容積が多く、枝（材積）の割合が高くなり収量は低下する。そこで、緑枝の発生がない枝から効率的に新しょうの発生を促す方法を検討する。

[ 成果の内容・特徴 ]

1. 枝傷処理の方法は、新しょうの発生がない材部に、鋸（刃幅1mm）で深さ5～7mm 程度の傷を、枝の側面に枝周の1/3～2/5につける。傷をつけたらパラフィルム系資材の接ぎ木テープを巻いて傷口を保護する。処理時期は施設栽培では6月上旬、露地栽培では7月上旬とする。処理する枝は、あらかじめ誘引を行っておく。
2. 処理後1か月を経過すると発芽が確認でき、施設栽培の若木の「長崎早生」では処理に対し60～70%が発芽し、パラフィルム系資材の接ぎ木テープで巻くと70%の芽が退化せずに順調に生長する（表1）。露地栽培の「陽玉」の若木では、処理に対し50%が発芽する。不定芽が発生しやすい枝は、枝径が20～30mm 程度である（図1）。
3. 傷口にパラフィルム系資材の接ぎ木テープを巻くことにより、傷口は1か月程度でカルスが癒合し、がんしゅ病等の発生はなかった。また、不定芽がテープの中から発生しても、自力でテープを破って伸長する（図1）。

[ 成果の活用面・留意点 ]

1. 処理に際しては、傷口が大きくなって枝が折れないように注意し、枝の側面から不定芽を発生させた方がよいので、必ず側面に処理する。
2. 発生した不定芽は、そのまま放置すると直立し徒長的に伸びて花が着生しにくい強勢な枝になるので早い時期から図2のように誘引を行う。
3. 供試樹は10年生未満の若木を使っており、樹勢が弱い場合は発芽が少なくなる恐れがある。

[ 具体的デ - タ ]

表 1 枝傷処理による不定芽の発生

| 処 理  | 処理数<br>(か所) | 発芽率<br>(%)  | 発芽数<br>(本) | 生育枝数<br>(本) | 残存率 <sup>2</sup><br>(%) |
|--|-------------|-------------|------------|-------------|-------------------------|
| 2000年；露地；陽 玉<br>枝傷処理 <sup>1</sup> ニールテープ 巻き<br>対 照 | 54<br>54    | 48.2<br>4.2 | 60<br>2    |             |                         |
| 2001年；施設；長崎早生<br>枝傷処理 <sup>1</sup> ニールテープ 巻き       | 94          | 73.4        | 140        | 62          | 44.3                    |
| 2002年；施設；長崎早生<br>枝傷処理 <sup>1</sup> ラフィルム系テープ 巻き    | 178         | 62.4        | 270        | 192         | 71.1                    |

<sup>2</sup> 発芽した不定芽の中で、退化せずに枝に生長した割合



図1 不定芽の発生状況



図2 不定芽の誘引状況

[その他]

研究課題名：新品種「涼風」「陽玉」の栽培技術の確立

予算区分：県単

研究期間：平成14年度（平11～15）

研究担当者：高見寿隆、山下義昭

発表論文等：なし